
魔法少女リリカルなのは 漆黒の抹殺者

亡霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 漆黒の抹殺者

【Nコード】

N1244Z

【作者名】

亡霊

【あらすじ】

As編から、空白期 StrikerSのなかで、なのは、フェイト、はやて達が中学生として平穩に過ごしている時間その裏で暗躍する一人の少年の物語

第1章 プロローグ

はじめまして、
亡霊です

初の二次創作小説です

いたらない所もありますが、よろしく願います
この物語は、AS編から空白期、Strikersに魔導師殺しを
紹介させてみた
誤字脱字とか、文法が変
とかあれば教えてください

第1章 始まりの物語

プロローグ

とある少年の話をしよう。
この少年は人々の平和や幸福を願う。

そして、闇を嫌う、闇を殺すのは闇、この世界の矛盾、より多くより確実に、この世界からなげきを、減らそうと思うなら、取るべき道は、他になかった。

手段の是非を問わず、目的の是非を疑わず、ただ無謬の天秤れど少年は、ただ闇を殺す

とある管理外世界、その廃墟に居る一人の少年、歳は10代前半、14歳から15歳位の子供で、身長は同世代の平均より少し高いぐらいで、顔立ちは歳相応の幼い顔立ちで、目は、歳不相応で冷え切った冷たい黒い目が特徴で髪の色は黒色で短く切っている。

なぜこの場所にいるかと思うと、この辺りで、銃声がなり響いているからだ。

そして、少年がつぶやいた。

「シュノワール、セットアップ」

この少年のセットアップした。

格好はFF?のスコールのようなバリアジャケットそして、右手には、ガンブレードが握られている。

「FF？のリボルバー」

「OK、マスターさっさと終わらせろぜ。」

少「あああ、120秒で片を付ける」

そして少年が動いた、廃墟の地理を巧みに利用しこちらにきづく前に銃を持っている男達を一人ずつ狩っている。ただ、音もなく地面に水が染み込んでいくように。

男達「！！！！」少「邪魔だ。」と無感情に18人も男達を斬っていく、その動きは、精密機械のように冷酷に狩っていった。

4

そして、少年の目の前に一人の男が立っていた、名前は確かロンバスティン

このロンバスティンこの男は麻薬や質量兵器の密売などをしていると罪状を思い出すと、ロンが口をひらいた。

ロン「なんなんだよお前」と話しながら杖型のデバイスで魔弾を打ってきたが、

少年に当たる前に消滅し少年が動いた、ただ一言の言葉を発して。

少「見ればわかるだろ？ただの管理局員だよ。」と

ガンブレード型のデバイスことノワールでロンの右腕を切断し苦しむロンが吼えた

「な、非殺傷設定じゃないだと！お前は、管理局だろ？」

少「お前には、抹殺許可が出ている。」と無感情に告げる。

そして、少年が次の動作に入ったただ、右側から、ロンの腹部をノワールで切り裂いた。

少「任務完了」

ノ「タイム113秒、記録更新だぜ、マスター」

少「ああそうだな、ノワール。こちらゴースト4、HQ応答せよ。」

HQ「こちらHQ確認した。ご苦労さんゴースト4、帰還しろ、レイジ。」

レイジ「了解した、カレン隊長」

第1章 プロローグ（後書き）

すいません。戦闘が雑で、これか頑張っています。

第1章 ?話 突然の始まり(前書き)

今回もがんばります。

第1章 ?話 突然の始まり

??SID

第三世界ヴァイゼン

今、俺が立っている場所は、とある高層ビルの15階の一室にいる。

?「こちら、ゴースト4、目標確認、指示を願う。」

HQ「確認した、ゴースト4、速やかに任務を遂行しろ」

「了解、任務を遂行する。」といって通信を切る。今、俺が持っているのは、WA2000

この銃は第97管理外世界のワルサー社の銃だ。

口径は308口径 重量約7Kg 全長905mm 装弾数6発
のブルパップ方式の銃でスコープはミッドチルダ製の最新式で通常モードと魔力感知モードがある。

種別 セミオートマチック のスナイパーライフルである。

そして、今、俺が居るビルから南から2kmに見えるビルの一室を今、WA2000のスコープで見ている。

今回の任務は、その一室である、とあるロストロギアの取引が行われるのに伴いその取引に参加するある人物の抹殺が今回の任務である。

ある部屋

「これが噂のロストロギアのレリックか」

「はい、最近になって教会や管理局が探しているものです。」

「このロストロギアは古代ベルカの物です。」

とそのとき護衛の男が倒れた、その直後に取引をしていた男も死んだ。

「目標確認狙撃開始」を合図にトリガーを弾いた。

まず最初に取り引をしていた男の護衛を狙撃しセミオートで周りに居た男達を射殺した。

「任務完了」と無感情に

「こちらゴースト4 任務終了した、これより撤退する。」

「了解した、一ど本部に顔を出せこれは、部隊長命令だ」

「了解した。」

時空管理局本局のとある部隊の一室

「よレイジご苦労さん」

とこれを掛けてきたこの男アラド・グラッデ歳は18で魔導師ランクはAAの陸戦魔導師の男

「ええありがとうございます。隊長はどちらに?」「奥の執務室に居るぞ。」

「失礼します」と言ってドアを開けると、一人の女性が書類整理をしていた。

「おかれり、任務ご苦労さんレイジ」といつて話してきた

「でなんですか、また任務ですか？カレン隊長殿」

カ「ええ貴方にご氏名の特殊任務よ「帰っていいですか。」だめよ」とあしらわれる。

レ「なんで自分なのですか？」 カ「情報一課からの要望よ」

レ「なんでまた情報一課からですか？」 「さあ、ただ貴方を直々に指名してきたの」

レ「自分の情報は大将以上でないと閲覧できないはずですが？」

カ「ま 誰かがレイジの情報を開示したかはわからないけど、今回は、貸し出しでは無く、

異動よ特戦一課からの異動よ」

レ「わかりました。短い間でしたがありがとうございます。」「なそれだけ！」

レ「えええそれだけです。」「とって執務室を出る「レイジきお

付けなさい向こうは最高評議会のお膝元よ。」

「ええ心得てありますよ、隊長」 「あなた10歳年齢詐称して
るでしょっ?」

「まだ13歳ですよ。」

とって部隊の執務室をでた。

第1章 ?話 突然の始まり(後書き)

スイマセン遅くなりました7

第1章 ?話 情報四課

管理局本局

情報四課SID

時空管理局本局 情報課そこは、一課から四課までであり、時空管理局の諜報活動の支援や身内を監視しての防諜活動

ある時は、スパイ活動や犯罪組織への潜入捜査あとテロリスト狩りがあり災厄暗殺任務を請け負う

ことがある。いわば情報四課は、管理局の汚れ仕事を担当し管理局の裏仕事に関わっている。

とそのコトを思いだしながら、指定された部屋に入った。

そこはただ広い部屋だった。

「……………*」だが後ろから、気配を察しとつさに右へ飛んだ。

「いい判断だ、だが甘い」と声がした。若い男だったその直後、男がナイフを抜いた

そして小さな動作でこちらに接近しナイフで切りかかってきた。

「ちょこまか逃げるな」といって、手首からもう一振りのナイフ

を足りだした。

この男ナイフ戦はかなりできるな。

と思ったそのとき、「いい加減に死にやがれ！ガキ」と蹴りを放ってきた。

その蹴りを左手で弾き行動にでた。

「手加減するので、くれぐれも死なないでください。」と冷淡に言葉を発した。

男SID

最初は旦那に頼まれた、任務だった

「今日うちの部隊に新人が来るから、試してやれ」と言われたと面倒と思ったが、このガキは面白い。

感もいいし、反射速度もいいしかもだが彼が驚いたのは、この少年が10歳そこらの子供と分けが違

うこのガキは、一言でいいゆくと、異常だった、恐怖さえ感じた。

そして目の前の少年が言葉を発した「手加減するので、くれぐれも死なないでください。」

といつてきた。

レイジSID

戦略予測、この男は、ナイフ戦を好んでいる。

魔法面で、デバイスを使う気配はない。

なら答えは簡単だ、すばやく、男の左足に向けて蹴りを放つ「ちっ……」そしてバランス崩した

次の瞬間、レイジはその後、男の右手をつかみ、肩の間接を外し、ナイフを奪い、男に奪ったナイフを突きつけた。

男「やるな、ガキ。」 といってきた。

だが少年がナイフを捨てて、言葉を発した。

レ「壁の向こうで高みの見物をしているのだろうか？ さっさと出て来い。」

??? SID

そこには数人局員がいた。

「何できずかれた。」と一人の男性局員がいった。

「ありえないでしょでたらめよ」と少しヒステリック気味の女性
局員が言葉を発した。

この防壁は特別製で見えないはずだった。

レイジSID

「ナイフを貸し手ください」と男に向かっていった。

「あ・あ・いいぞ」といつて軽く投げてきた。 <良い子は真似し
てはいけません。 >

とナイフを借り手、そのナイフを壁に向かって投げつけた。

レ「こんにちは」

といつて爽やかに壁を蹴り破った先に居たのは、身長は2メート
ルを超す大男だった。

「失礼と思わんのかね？」と大男が言ってきた。

「いきなり、ナイフを持って襲ってくる部隊は初めてですよ」

「いきなりの歓迎に戸惑ったかね？」　レ「いえ、そんなことはありませんよ」

「と自己紹介が私は、情報四課課長、バ「バクスターモーガン一等陸佐殿」私を知っているのか。」

「ええ自分の行く部隊のことを少し調べましたよ」とたん単に話す少年。

レ「ではこちらも自己」その必要はないよ、クジヨウ　レイジニ等空尉いや、魔導師殺しのクジヨウ君」自己紹介はいらねえですね。」

バ「よろしく、クジヨウニ尉」「こちらこそモーガン一等陸佐殿」と手を取り握手をした。

第1章 ?話 急変

????SID

「また派手にやったようだな、彼らは」と一人の男が言った。

「だが、建物ごと爆破はやりすぎだぞ」
一人の老人が

「しかし、まあその前の研究所の摘発に比べたらまだ可愛いものよ」

また一人の女性

「だが、公になっていない一週間まえの管理外世界の大統領の暗殺に比べれば軽いぞ」

また、一人の男性

情報四課SID

「任務だ。」とバクスターの短い一言で、部隊が静かになった。

「今回の任務はとある、物資の回収が、今回の任務だ。」

「回収任務ですか？うにの任務にしては、平凡な任務ですね。」

と一人の男性隊員が言った。

たしかに今回の任務より、ランクの低い任務だなと、思ったレイジだった。

そしてバクスターが再び口を開いた。

「なお、今回の任務は特殊戦術一課との合同任務になる。」

その言葉を聴いた隊員達がざわめいた。

「何でよりもよって特戦一課なのでしょうか？」

と隊員が言った。

「今回の任務の目標は、このケース回収がこの任務のもくつてきだ。」

「回収任務なら、自分達できます。詳しい理由を教えてください。」

「今回の任務の詳細は、特殊戦術一課隊長のカレン・フツケバイン一等空佐にご説明していただきます。」

と言った瞬感全身に悪寒が発した。

「どうぞ、　フツケバインー佐お入りください。」

そして入ってきたのは、佐官の制服に身を包んだ、カレン・フツケバインー等空佐だった

カ「久しぶり、レイジ元気にしてた？「帰ってください」ええせっかくきたんだからいいじゃない」

バ「っそろそろ本題にいいか？」と少し怒っているバクスター

カ「ええええ、今回の任務の詳細は、このロストログアの回収です。」

と画面の前に赤い宝石のような物が映し出された。

カ「このロストログアは、聖王時代、古代ベルカの遺産で大変危険な物です。この案件に措いて

ジェイル・スカリエツィやカール・クラフトが背後にいることが判明しました。ですから、今回

の任務にたいして、特別部隊を創設し4日後の2000時において作戦を決行します。なお今回の任務に

対して、質量武装の許可もでていません。この二人に対して、拘束が

不可能なら殺害も許可が出ています。」

「かなり急な作戦ですね、フツケバイン一佐」

「えええかなり急ですけど、今回、四課は、一課のバックアップに回ってもらいます。」

「なぜ、後方なのでしょう？」

「簡単よ、あなた達四課は、特戦一課の変則的な戦闘について行ける？」

「たしかに、きついですね。」

タシかに、四課では、特に変則的で独立行動の一課に付いていけない、だがなぜだそんなことより、

一課だけで、単独でやればいいのにと疑問が残った。

「なお今回、先行するのは、私達一課とそこで考えているレイジが先に行くから。」

「おいまてや！何勝手に先行組みにしているのですか？」

「ええだって、この中で、まともについて来られるのあなた位よ。」

「ですけど」「しかも、元がつくけど元特戦一課のエースが逃げるの」「わかりました。」

「ここまで言われたら、逃げられない。」

だが、回りは呆然としている、確かに

今回の任務のハードルが一気に上がったぞ、ジェイル・スカリエ
ツティは一級の次元犯罪者であり遺伝工学や戦闘機人やプロジェク
トFや違法な生態実験で次元世界で指名手配されている人物である。
だが俺にとって一番驚いたのは、この男、カール・クラフトである。
元大魔導師であり、人を何とも思わない、災厄のテロリストでこの
俺にとってもっとも、憎く今でも殺したい人物である。

そんなことを思っていると、会議が終わった。

「ああそおそお、レイジあなたのコールサインは、まだゴースト4
よ」

「なんかノリノリですね。」

「ええとても嬉しいわ、だって、任務中にレイジを弄れるから。」

なんかこの任務とても寒気がしてきたな。

4日後作戦開始

第1章 ?話 作戦開始

現在、管理外世界の上空

「あと、5分30秒後に作戦開始だ、いいなヤロドー共」

「準備完了です。隊長殿」「」「」「」

「」「」「」我らが、カレン隊長とその一味とその心永遠に我らが
ボス」「」「」

大丈夫がこの部隊と思うレイジだった。

と言葉を掛け合う20人の精鋭の管理局員達、

この管理局員達は、特戦一課の強襲要員で、管理局裏部隊一位の実力のある部隊なのだ。

今、俺が乗っているヘリは、航空武装隊が採用している、ヘリとは違う。

V S F - 3 2 コードネーム「サイレント・ホーク」

モデルは、V - 2 2 オプトレイをミットチルダの技術で、強化改良した。ヘリ「テイルロータ機」である

特徴は、ほぼ無音かした高性能エンジンと魔力探知と赤外線レーダおよび視認不可のECSを装備しているところが特徴で、武装は操縦席の下にある12・6mmドアガンや、船体の横に付いている4連式ミサイルポットが二つ付いている個付いている。

そんなことを考えていたら、アラドから話しかけてきた。

「よ、レイジ元気良さうだな。」

「お久しぶりですねアラドさん」

「いやいや、転属と聞いたときは驚いたがな。だがまたお前と肩をまらべて、任務出るとは思わなかったよ。」

「ですが、この任務はおかいしコトだらけですよ」

「普通に考えてください、2人もの大物犯罪者の逮捕もしくは殺害おかしいと思いませんか？」

「タシかにくさいさだが、これは任務だ、余計なことを考えるなよゴースト4」

「あそおそおサイファアの姉貴とフォルティス奴も心配してたぞ。」

「げ、あのシコタンとあのエセ詐欺師がか？」

と本気で、嫌な顔をする。

サイファーはある意味バトルジャンキーで、エセ詐欺師のフオルティスは嘘か真実よくわからないし本心が掴めない人物である。

サ「久しぶりだなレイジ」

レ「お久しぶりですね、ゴースト2、それと、そのエセ詐欺師」

フォ「酷いですね、レイジまだ怒っているのですか？」

レ「それは、酷いですね。あなたの作戦で一番貧乏くじを引いたのはだれでしたっけ？」

フォ「嫌だな、それわたまたまですよ」と笑顔で

サ「だがレイジの行ったとおりこの任務は急過ぎる何か裏がある

かもしれないな」

と話を戻すサイファー

「でも姉貴、この任務を回して来たのは、管理局の上層部ですよ。

」

「だから、サイファーとレイジは疑問が残ると」といゆうフォルテイス「エセ詐欺師」

「だから私は詐欺師ではありませんよ！」

「なんだ自覚症状あるんだ」とレイジ

「いやいやむしろ自覚ないほどヤバイぞ」とアラド

「まあタシかにフォルテイスは策士だからな」と納得するサイファー

と話していると、前から、隊長から指示が来た。

「お前ら、これからこの任務の最後の確認だ。」

とその言葉で部隊全体が、真剣な顔に戻った。

「まず、武装確認」とカレンがいゆうと皆が一斉に、獲物の確認に入る。

レイジ達が持っている物は、デバイスでもなく、ただの質量兵器を装備している。

装備のメインはH&KのG36、口径は5.56mmで30連発でセミオートとフルオートがついていて初期装備で四倍率のドットサイトが付いている高性能アサルトライフルである。

サブはG17という拳銃を装備している。グロック社の拳銃で口径は9mmで17連発の拳銃

そして腰のポーチには手投弾が二個「M67」手投弾は半径8メートル以内の物を殺傷する能力を持っている。

そのほかにサバイバルナイフやC4爆弾やスタングレナードなど

「作戦開始よ全ユニットダイブ作戦はB - 3 行動開始」

と次々にヘリから降下する隊員達

「上空180メートルからの自由落下か」と呟くレイジ

「あら怖いレイジ」こんなときになにしてるんですか隊長「いいじゃない」

「は〜ああいかわらさずですね」

「まいいですけど、お先に行きますよ隊長殿」

「ええ地上で会いましょうゴースト4」

「OKゴースト1」

といてへりから飛び降りる

このあと後悔したこのときの任務を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1244z/>

魔法少女リリカルなのは 漆黒の抹殺者

2011年12月30日02時52分発行